

音は語る

文 藤盛 一朗

連載 42

自然賛美と「血の日曜日事件」 祈りと告発の声示した鐘の響き



都響を指揮し、フィンランドの現代曲《極北の真珠》とシヨスタコーヴィチの交響曲第11番の秀演を聴かせたストルゴーズ ©Rikimaru Hotta

オーケストラの定期公演は、未知の世界に聴き手をいざなうことがある。

東京都交響楽団の第1072回定期演奏会（10月1日、サントリーホール）は、フィンランドの作曲家、オウティ・タルキアイネンの2023年の作品《極北の真珠》と、シヨスタコーヴィチの交響曲第11番《1905年》を組み合わせた。前者は日本初演であり、世界初演者でもあるフィンランド人指揮者、ヨーン・ストルゴーズの存在がなければ、シヨスタコーヴィチと合わせてその音楽が響くことはなかっただろう。

ラップランド生まれ 23年初演の《極北の真珠》

フィンランドは首都ヘルシンキや音楽祭の開かれるサヴォリンナ、バルト海に臨むトゥルクを訪れたことがある。だが、南北に広がるフィンラン

ドでは、これらのまちは南に位置する。タルキアイネンが生まれたのは、北方のラップランド地方ロヴァニエミ。サントクロースの古里を掲げて活動している所で、ラップランドはオーロラの名所として知られる。

曲の始まりは、ヴィヴァルディの《四季》「冬」を連想させた。ラップランドの自然が主題であることの暗喩だろう。キツツキのドラミングを思わせる音が響き（第2曲「アメジスト」）、ゲシュトップフト奏法のホルンやファゴット、大太鼓の深々とした音が表すのは夜の森の神秘だろうか（第5曲「シロクロウ」）。20分超の曲は全体が自然への賛美であり、急速な地球温暖化によってそこにも破壊と変化の脅威が押し寄せていることが創作の背景にある。



ソロ演奏の多い《極北の真珠》の中でも、打楽器奏者が大活躍 ©Rikimaru Hotta

「室内管弦楽のための協奏曲」という副題の通り、小編成の弦楽器や木管楽器のソロが活躍する。中でもグロッケンシュピール、タムタムなど11種類の楽器の演奏を一人でこなした打楽器奏者は、最大の殊勲者だった。全体の演奏に耳を澄ませ、ベストの質と音量で音を繰り出す。優れた打楽器演奏の要件がよく分かる。

「ハロー 空よ」と題された第7曲では、鐘が響いた。初演地は、ロシア国境に近い人口約3千人のラップランドの町、サツラのルター派教会。聴く者に容易に祈りを想い起こさせる。ラップランド、ひいてはフィンランドの大地の自然や安らかさが保たれることへの願い。そこでは、自然との共生や祈りと同時に、破壊もなす人間存在の両面が意識される。歴史を調べると、ラップランドは、ナチスドイツによって蹂躪され、ソ連とフィンランドの戦争の場にもなったことを知る。終曲で帰する《四季》の「冬」を思わせる規則的な律動は、不安や悲観の影も宿す。

ストルゴーズ指揮都響 シヨスタコーヴィチ11番の終結

後半のシヨスタコーヴィチの交響曲第11番は、題名の通り、1905年にサンクトペテルブルクで起きた「血の日曜日事件」を基にしている。「宮殿

広場」と題された第1楽章は、凍つく冬宮を描くようであり、実際は国家権力の不気味なまでの力を表す。皇帝を「おっとさん」と呼び、訴えれば慈悲深く聞き入れられると信じていた民衆の願いは、軍の発砲によって無残に打ち砕かれる。

圧殺された人間一人ひとりに思いと尊厳がある。それは労働歌をモチーフとする旋律で表される。痛みをもつて思い起こされ、こんなことがあつてよいのかという「否」の思いを聴く者に喚起する。「人間の声」と「力」を対比させ、交錯させるのは、シヨスタコーヴィチの得意とする手法だ。

終楽章は、「警鐘」の副題を持つ。敵が攻めこんできたり、火事が起きた時に打ち鳴らす鐘。この日のストルゴーズ指揮都響の演奏の頂点は、終結の鐘の恐ろしいほどの実在感だった。猛烈なクレッシェンドをかけ、最後の一打は、オーケストラの全奏が終始しても、しばらく余韻を残した。

目の前にある2025年の世界状況は、もはや「警鐘を鳴らす」という段階ではない。ウクライナやパレスチナ自治区ガザでは、市民の犠牲が続く。国際社会は解決策を打ち出せずにいる。鐘は、こうした状況を告発する鋭く、重く「声」のように心に響いた。

作曲が着手された1956年、ソ連軍の戦車はブダペストに入り、改革を



ノット指揮東響や東響コーラスによる《マタイ受難曲》
（9月28日、ミューザ川崎シンフォニーホール ©N.Ikegami/TSO）

だが、実際の演奏には、聴こえてくるはずのものが聴こえてこないもどかしさが残った。バッハは、「十字架につけろ」と叫ぶ群衆の狂奔に人間の闇を見つめている。弟子は弟子でイエスが捕縛された時には皆逃げ去り、「あなたも一緒にいたでしょう」と言われれば、3回も否定するペトロの姿にバッハは自分を重ね、人間の弱さを見る。同時にペトロがイエスを思い出して激しく泣く心の動きを克明に描いている。

意外にも、今回のノットの指揮は、バッハの音楽の豊かなドラマ性を描く起伏に乏しく、受難の物語に沿って会衆（信徒）が思いを確かめ、信仰を新たにする節目節目のコーラル（讃美歌）も、等し並みに聴こえてしまう。54番コーラル「おお、主の御顔、血と傷に覆われ…」が、本

来の全曲の頂点の一つとして感じられない。

言葉の一つ一つを大切にし、聖金曜日の礼拝そのものとして作曲された原曲の姿と、2千席の大ホールで大きな合唱団が歌い、大型のパイプオルガンも響く演奏のスケールの調整が十分でなかったことに原因の一つはあるかもしれない。ゆつたりめのテンポも、全体を大味にする一因となった。

それでも、もちろん名曲中の名曲である。全身全霊という言葉がふさわしい東響をはじめ出演者の音楽への献身に胸を打たれる瞬間もあった。ペトロの否認の場面の後、歌われる39番アリア「憐れみたまえ、わが神よ」。アンナ・ルチア・リヒターの歌唱と、第1コンサートマスター、小林竜成のヴァイオリンは、口短調の旋律から再生の希望をたちのぼらせた。



「憐れみたまえ、わが神よ」を演奏するアンナ・ルチア・リヒターと小林竜成 ©N.Ikegami/TSO